

## 国際シンポジウム「捕虜から見た日露戦争」

ERINA調査研究部研究員 三村光弘

2005年4月3日、大阪市の大阪国際会議場で、国際シンポジウム「捕虜から見た日露戦争」が日米露友好シンポジウム実行委員会（委員長：中山太郎元外相）の主催で開催された。このシンポジウムは日露戦争を終結させたポーツマス講和条約締結100周年を記念し、両国が互いの戦争捕虜をどう受け入れたかを見直すことで平和と今後の関係を考える趣旨で行われた。シンポジウムでは冒頭、主催者を代表して中山太郎元外相、来賓として駐大阪ロシア総領事、駐大阪・神戸アメリカ総領事、大阪市長の挨拶があった。駐大阪の2人の領事は、大阪弁を所々に交えて日本語で挨拶を行うなど、和気あいあいとしたオープニングだった。このシンポジウムは一般市民が主な対象で、中高年齢層を中心に約500人ほどの観客が客席をうめた。

このシンポジウムで初めて知ることになったのは、日露戦争時の7万名を超えるロシア人捕虜のうち、約2万2千人を収容した最大の捕虜収容所が現在の堺市と高石市にまたがる浜寺公園に設置されたという事実であった。筆者は大阪出身であるが、大阪の歴史を学んだときにも、日露戦争時に大阪に捕虜収容所が存在したことは教えられなかったように思う。

シンポジウムは、国家間の緊張（＝戦争）と市民の温かい交流（＝日露両国での捕虜と市民の交流）が矛盾せずに行われていたということを紹介することが大きな目的であったため、講演やパネルディスカッションの前には、太鼓の演奏や東京のロシア人学校の生徒による歌が披露された。



【写真1】歌を披露する東京のロシア人学校の生徒たち

基調講演は青山学院大学教授の袴田茂樹氏が行った。基調講演で袴田氏は21世紀を日口間の対立、緊張を克服する世紀にすることをよびかけた。その後の、パネルディスカッションでは、拓殖大学の佐瀬昌盛教授が日露戦争の歴史的位置付けについて日本の列強入りの契機となる戦争であり、日英同盟の存在や米国の講和という要素から、単なる二国間の戦争としてではなく、日露戦争を第0次世界大戦と考える見方もあることを紹介した。収容所の研究活動を続けている大阪大学職員の中野生穂氏が、日露戦争では両国ともハーグ条約の規定を順守して捕虜を手厚く扱い、世界から称賛されたことや、大阪の浜寺収容所に収容されたロシア人捕虜は比較的自由に街を散歩し海水浴も楽しんだことや、収容所内では日本語教室が大人気だったことなどを紹介した。

日露戦争では、日本兵も捕虜となった。日本兵はサンクトペテルブルグから約260キロの距離にあるメドページ村の収容所に約1,800人が収容された。日本の捕虜がはるばるメドページ村まで連れてこられたのは、ロシアの巨大さを知らせるための指示があったためであることが紹介された。パネリストのロゴジン村長は「村には19人の日本人捕虜の墓があったが、第二次大戦でのドイツ軍の侵攻時に破壊されてしまった。しかし、近年、7基の墓石が発見された。地元の人々により墓地までの道ができ、墓地が整備された。

今年の8月に慰霊公園のオープン式典をおこなう。」と語った。中山元外相は「村の博物館には、日本人捕虜が作った三味線や尺八などが保存されていた。手厚く扱われたことがうかがえた」と解説した。

パネルディスカッションの終了後は、混声合唱団によるロシア民謡、日本の唱歌などが披露された。また、会場の外には、日露戦争にまつわる絵画やポスターなどが展示され、日露戦争当時の状況を理解しやすくするための様々な工夫がなされていた。学術シンポジウムとは随分様相の異なるシンポジウムであったが、日本とロシアの関係を広く知らしめる上で、有益なシンポジウムであったと感じた。



【写真2】日露戦争にまつわる絵画の展示